

反 儉 約 の す す め

——19世紀フランスの家庭経済論をめぐって——

末 広 菜 穂 子*

は じ め に

前稿まで19世紀フランスで発刊されたいくつかの家政書を手がかりに、19世紀における女性の経済的役割について論考を進めてきた⁽¹⁾。そこで材料としたのは、中・上流階層を対象とした伝統的なスタイルの主婦向け家政書とともに、この世紀に新しく登場してきた労働者階級の主婦ないしは主婦予備軍である未婚の労働者女性向けに書かれた家政手引き書であった。この時代に進行した経済的变化の中で、女性全般——とりわけ労働者階級の女性——については、家庭の内外におけるその経済的役割が複雑・増大化することとなる。階級を問わず求められる共通のモラルの下で、厳しい社会的・経済的現実⁽²⁾に追いつめられる女性の姿が、庶民の女性の逞しい理想像を描かんとする家政書の端々に垣間見られたところである。家庭——名もなき女性たち一人一人が個々に苦闘し、守ろうとしていたこの小宇宙——の存在とは果たして何なのか。そこでの経済活動は、当時、社会全体の中でどのように位置づけられていたのであろうか。そこで営まれる経済生活には、どのような意味や方向性が与えられていたのであろうか。

本稿では、こうした疑問の一端を明らかにするため、視点を変えて、この時代に著された家庭経済についての論考をもとに、社会全体の中における家庭の位置を探る。ここで取り上げようとする小論⁽²⁾は、当時の多くの家庭経済論がそうであったよ

* 広島経済大学経済学部教授

(1) 末広菜穂子「19世紀フランスにおける主婦の経済観念」『広島経済大学経済研究論集』1999年9月。末広菜穂子「アンリエットとジャンヌ、それぞれの主婦修行—19世紀フランスの家政書から—(I)」『広島経済大学経済研究論集』2002年6月。末広菜穂子「アンリエットとジャンヌ、それぞれの主婦修行—19世紀フランスの家政書から—(II)」『広島経済大学経済研究論集』2002年12月。および、末広菜穂子「家庭の築き方——19世紀フランスにおける新婚夫婦の生活設計——」『広島経済大学経済研究論集』2005年6月。

(2) 次頁に掲載。

うに、経済学諸家によって書かれたものではない。著者アンリ＝シャルル・ルヌヴェー（Henri-Charles Leneveu）は1817年2月9日、パリに生まれ、ディド（Didot）印刷所⁽³⁾で植字工を務めた。1840年代に発行された初の労働者の手による新聞として名高い『アトリエ（*L'Atelier*）』紙の編集人として中心的な役割を果たし、政治活動家として名を成すこととなる。彼は知識の大衆化を目的とした「実用書文庫（*la Bibliothèque utile*）⁽⁴⁾」を創設するなどして労働者階級のための良書の出版を手がけ、自らも筆を執って啓発的な書をいくつか残している。本書『家庭の予算（*Le Budget du foyer*）』もそうした著作の一つで、一般の労働者家庭の家計をテーマとしている。主婦向けに書かれたというよりは、労働者家庭の家長を主たる読者対象とした書き方であるが⁽⁵⁾、労働者の生活の実態や問題点をブルジョアジーに訴えかける目的も執筆の動機にあったのではないと思われる。熱心なアトリエ派として社会カトリシズムに傾倒したルヌヴェーらしく、理性と道徳を何より重んじる姿勢を底辺に堅固に保ちながら、彼が労働者にとってふさわしく望ましいと考えた経済生活の一つのモデルを提示している。しかし一方では、労働者が対峙する過酷な現実に対する認識もルヌヴェーは忘れていない。本書は、前半、労働者にとって、生活と経済がどうあるべきかを家計の支出項目に沿って述べ、後半では、ある労働者家族の経済状況を具体例として示すという形をとっている。労働者の生活実態を熟知していたはずである著者が、社会全体の中でのその意味づけを模索しながら、あるべき家庭経済の姿を描こうとしているのである。本稿では、ルヌヴェーのさまざまな記述を、これまで取り上げてきた女性読者を対象とする家政書との比較も踏まえながら検討していくこととする。

家庭経済の意義と目的

本書の出版は1872年。普仏戦争の敗北とパリ・コミューンの瓦解を経た後の第三

-
- (2) Henri-Charles Leneveu, *Le Budget du foyer, économie domestique*, Paris, Librairie Pagnerre, 1872.
- (3) ディド家の印刷所は18世紀からの歴史を持ち、特に19世紀前期は優れた植字技術で名を馳せたフィルマン・ディド（Firmin Didot）のもと、多くの著作の出版を手がけ、現在も Firmin Didot 社の名の下に CPI グループ傘下に入って出版を続けている。
- (4) 『アトリエ』紙編集人たちに大きな影響を与えたとされるフィリップ＝J.-B. ビュシェ（Philippe-Joseph-Benjamin Buchez）をはじめ、アンティーム・コルボン（Anthime Corbon）、ジュールジュ・サンド（George Sand）、ジュール・シモン（Jules Simon）らによる、社会科学、自然科学、歴史、文学など多岐に亘る分野の著作がここで出版された。
- (5) ただし、本書の大きな部分を占める家計簿の記帳については、その役割を主婦に想定しているようである。

共和制下、ルヌヴー自身はパリ市議会議員としての活動を始めた時期であった。その序文は、「経済学を研究する必要性と有用性が現在より大きかったことはおそらくこれまでなかったであろう」という文章で始まっている。ルヌヴーの政治家としての使命感の表れであろうか。対外戦争と市民戦争によって破壊され、疲弊したフランスがその豊かさをいかに回復するかという国家的課題が、まず解決すべき問題の大前提として掲げられている。

そうした大問題に関連して家庭経済を論ずることの意義を、ルヌヴーは次のように述べている。「国家の豊かさは、個人の豊かさの総和に他ならず、いうならば、労働と信用によって再び生み出されるべきである。従って今こそ、国家の豊かさがひとりでの回復できるような条件を大衆に与える好適な時期である。(中略) 個人や家族の生活を成り立たせるような個人的経済力を、生み出し増やすための最良の手立てについて研究するべきではないだろうか。」ルヌヴーは、国家や共同体の財政についての大局的議論に先立つ重要課題として、社会経済の基礎となる個々の家計の健全な立て直しこそを急務としたのである。国家、共同体、家庭という三つの予算の中で、家庭の予算は規模として最も小さいものであるが、その重要性という点では同じではない。小さな家計から個々に引き出される少額の税の総体が国家予算を実現するものであるから、家計こそ安全で幸福な社会を作る基盤であり、その良き組織化が必要となるのである。

個々の家庭経済の豊かさが、全体、すなわち国家の豊かさの源泉であるという考え方は、特に珍しいものではないが、ルヌヴーには、豊かさを生み出し、推進し、かつ享受する主役は、国家ではなく、あくまで個人と個々の家族でなくてはならないという強い確信と願望とがあった。「たとえ社会がその組織全体として個人のために何事かをうまくなしうるとしても、個人がしなければいけないことや個人ができることと比較すれば、社会が今日まで企てたことや将来実現できそうなことは、ほとんど無に等しいものである。」⁽⁷⁾ 個々の家族集団をそれぞれ最高度に繁栄させるためのサービス提供こそが政府の最大の役割であり、個人の活動の自由を損なう傾向に陥りがちな——これはルヌヴー自身の認識であるが——政府の権力行使を止めるためにも、家族の経済生活を向上させ、政府の役割や権力の範囲をさらにいっそう縮小させることが必要であると考えたのである。

こうした個に対する重要視は、当然のことながら個に対しての大きな期待や責任、義務を求めるところとなる。家庭経済について学ぶことは、個人がそれによって利

(6) Henri-Charles Leneveu, *op.cit.*, pp. 3-4.

(7) *Ibid.*, p.6.

益を得られるという利点を持つだけではない。それは「市民としての義務を完遂するための一種の準備のようなものとなる」⁽⁸⁾とルヌヴーは付け加えている。公正と合理、賢明さ、先見性といったものが、家庭経済の営みの基礎に存在する精神として位置づけられている。家庭経済についての正しい知識の普及とその実践は、本来めざすところの経済的効果だけではなく、労働者に自らの生活や生き方を見つめさせることによって、道徳的、精神的効果を生み出すものなのである。同じ労働者の間においてさえ経済的格差が進み、その生活状況が多様化して問題が複雑さを増してはいるが、家庭の規模や貧窮の度合いがたとえ異なっていたとしても、家庭経済を考える根本となるこうした精神は変わることはない。厳しい経済状態の中で追いつめられた労働者たちの暴走——著者によれば、聡明な者の共産主義への狂気と、そうでない者のアブサンへの狂気——から起こりうる不穏な事態を回避するために、労働者間の融和と連帯を図り、社会問題を真に解決する道として、ルヌヴーが抱いていた家庭経済研究に対する熱い期待をここに感じとることができるのである。

家計収支の均衡と儉約

この家庭経済論でルヌヴーが大きなテーマとしているのは、家計収支の均衡という問題をいかに考えるべきかである。収入と支出について論じるとき、彼は再び国家と家庭との比較を持ち出している。すなわち、国家の財政においては、支出を実現するための財源は相対的に弾力的である。民主的手続きを踏まえた合意により必要性や将来性が認められれば、その支出を実現するため、国家は税または負債による収入をかなりの程度引き出すことができる。一方、家庭の支出は、家族の収入によって定められた範囲内でしか実現することができない。とりわけ、収入が給与所得のみに依拠している労働者の場合はそうであり、働き手の病気などのために、増えるよりも減る可能性の方が多い不安定な性質のものであるから、予定される収入よりもさらに低い水準に支出の予算を設定しておくことが賢明なやり方であるとするのが常識的考えである。興味深いのは、ルヌヴーがその考えが現実的であることを認めながらも、それに敢えて異を唱えている点である。

彼にとっては、国家と同じく、家庭においても支出がまず先決であり、重要でなければならぬ。収入に応じたつつまじやかな生活という聞こえはよいが、労働者の生活実態はそれとはほど遠いものである。年老いた父、妻と2人の子どもの5人家族を抱える労働者のつぶやきをルヌヴーは紹介している。「1600フランでやり

(8) *Ibid.*, p. 5.

くりしているんだ。ひどい家、貧しい食事、みじめな服。子どもたちはほとんどまったく教育を受けられない。私の兄がそうだったように、子どもたちを小さいときから工場の仕事に就かせざるをえないだろう。そうなれば、子どもたちは将来も肉体労働者をして暮らすしか他に仕方がなくなるだろう。貧乏人の生活とはなんとみじめなんだろう。何しろもう限界ぎりぎりなんだ。家ではみんなジャガイモと豆を食べ、私は酒瓶の底に自分の苦勞を紛らわそうとしている。こんなことがどれだけ続くの(9)だろう。」ただただ支出を抑えるだけでは、生活の惨めさに麻痺した無気力状態か、自暴自棄からの暴走状態に陥りかねないところへ労働者を追いつめる結果となる。「出を制す」式の儉約のみを説き、その結果、生活の質を著しく貶めてしまつては、労働者の生活のほんとうの改善にはつながらないというのが、ルヌヴェーの信ずるところであった。

従つて、通常は美德とされる儉約について、ルヌヴェーは否定的でさえある。これは、この時代の労働者向け家政書によく見られるような、賢明な儉約を唯一の美德として促す論調とはまったく異なる点である。ルヌヴェーは、ここでは儉約を中途半端な美德と呼んでいる。彼の考えでは、儉約とは、浪費と吝嗇のちょうど中庸にあるのものではない。貧しい者に対して儉約をすすめることは、後者の吝嗇の方へと導く牽引力をより強く働かせることである。「最初はすばらしい目的に触発されて、不必要な出費を避けることにのみ努めていたのに、みみっちい計算に少しずつ近づいていき、やがてそれは理性を欠いたものとなるのだ。」(10)まず、通常は最も削りやすい支出として食費が選ばれ、食事の質が落とされる。質の悪いパンやまずい料理のせいで消費はさらに減退する。衣や住においても同様のことが起こり、結果的に、数字の上での儉約は成功するが、生活はつましいという水準を通り越して、さもしいという形容詞に近いものになってしまうのだ。「儉約は、それによってきちんと生活することを目的としていた者たちを、ゆっくりと死に至らしめるもの(11)だ。」ルヌヴェーはフランス国民の二つの悪しき典型を挙げている。鷹揚で、将来のことにも自分のことにも頓着しない、刺激と浪費の渦の中に溺れる都市の労働者。忍耐強くはあるが、利己的で蓄えを増やすことしか考えず、金の有る無しにかかわらず旧弊でみじめな生活から脱することのできない農村の田舎者(12)。そのどちらの暮らしも、

(9) *Ibid.*, p. 10.

(10) *Ibid.*, p. 13.

(11) *Ibid.*, p. 14.

(12) *Ibid.*, pp. 14–15. このように、ルヌヴェーは本書で農民と工業労働者を、性格、風習、生活様式、政治的態度の相互に異なる集団として常に対置させた形で記述しているが、両者

望ましい真っ当な生活とはいえないが、ルヌヴーは、通常攻撃されがちな浪費より吝嗇の方へ、意識的に非難の矛先を向けているように思える。浪費と吝嗇のそれぞれの欠陥を正すためには、人間の真に豊かで幸福な生活に向けて到達すべき生活水準の目標をまず定める必要がある。これにより無駄は正され、不足は補われるのである。ルヌヴーがこの家庭経済論でめざしたことはまさにそれである。ごく普通の、贅沢でもなくあさましくもない、労働者にも経済的に実現可能な、人間らしい生活とは何かを設定することであった。

もちろん、現実に立ち帰ると、収入を越える支出は、貧しい労働者にとって家計破綻を導くだけである。ルヌヴーは家計の収支均衡を図るという常識的な考えに敢えて異を唱えはするが、最終的結論としては、そこに立ち戻るべきであることは認めている。しかし、そこには留保条件が付け加えられている。その留保条件とはすなわち、人間としての尊厳を失わない生活を送るための必要な支出を家長たる者が正確に把握すること、そして収入不足を理由にして支出を削減したり節約することを考える前に、その必要支出を実現できる水準にまで収入を引き上げることを検討するのが先決であること、である。ルヌヴーはそれだけの収入を、家長は揺るぎない意志を持って一時間も無駄にせずに獲得する努力をしなければならないと強調している。また、収支の均衡を図る一つ的手段として、一時的な借財という道もまったく否定してはいない。しかし、もちろん借財は労働者やその家族に大きなリスクを負わせるものであるし、年老いた年金生活者のように、収入の増加がまったく望めない人々も一方で存在する。ルヌヴーはこうした弱者を支える扶助組織や互助組織の整備を求めた上で、やはり家計の基本を収入ではなく、必要支出に置く原則の大切さを訴えるのである。彼にとって、家庭の予算を立てる目的とは、あくまでも、家族の望ましい生活にとって不可欠な費用を、そしてそれを実現する努力がどれぐらい必要かを確定することであり、収入水準に合わせたいわゆる分相応の生活に、無難に、しかし多くの場合はみじめに、とどまり続けることではなかったのである。

めざすべき生活に向けて

それでは、労働者家族がめざすべき生活とはどのようなものであったのだろうか。ルヌヴーはここで、普通の収入を得ている肉体労働者の家族にとって必要やむを得ない不可欠の支出について吟味しようとしている。⁽¹³⁾「一つの家族を視点に据えて、

の対立関係を融和する方策をあちこちで提言してもいる。Ibid., pp. 24–25 および Ibid., pp. 84–89.

(13) Ibid., p. 12.

我々は人間にとって当たり前で完璧な唯一の状態を常に検討していく⁽¹⁴⁾と述べているように、彼は、住居、食事、衣服等の基本的な物質生活を始めとする様々な生活分野で、生活の量・質両面において何を重要と考えるのか、支出計画を立てる際、注意すべきことは何か、何を儉約すべきで、何を儉約してはならないか、などについて言及したあと、その総括として支出全体の管理、すなわち家計簿の実際のつけ方などを紹介している。生活全体を見渡そうとはしているものの、あくまでルヌヴェー自らが生活のあれこれの中で注目した部分を記述したものであるから、細々とした生活技術をもれなく伝えようとする通常の家政書とは視点がまったく異なるし、体系性にも欠けはするが、各生活分野の中で、また生活全体の中で、彼が家庭経済の中で何を肝要と考えていたのかはうかがうことができる。以下、ルヌヴェーの主張をここでいくつかまとめてみよう。

ルヌヴェーは、労働者の消費生活にとって最も大きな割合を占めるものを住居と食事であるとしている。住居については、通常必要とされる身体の衛生の側面と並んで、精神の衛生の側面を彼は強調している。身体と精神の両方の安息が得られ、家族の各々が活力と明るさを取り戻すことができるような住居である。仕事のために自らは家にいる時間が少ない家長も、長時間そこで生活をする家族のために、できるだけ居心地のよい住居を確保しなければならない。特に家事をする女性のためには、台所の換気の良さが、家族が十分休息するためには、暗く湿っていない清潔な寝室の必要性が、不可欠なものとして強調されている。便利ではないが、上り下りの運動が健康にも良い建物の上階や屋根裏の住居は、明るく空気の通りのよい住居という点では理想的で、家賃が安くて経済的でもある。暖房費の節約のために台所近くに寝室を設ける間取りの住居は当時よく見かけられたが、不潔になりがちであるとしてルヌヴェーは避けるべきものとしている⁽¹⁵⁾。

家賃の支払いが慣行によって半年払いや季払いとなっていることが、週払いや月払いで収入を受け取る労働者にとって住宅問題に関わる経済的困難の源となっていることをルヌヴェーは指摘している。家賃の支払いに必要な相当額を、毎回の収入から使わずにきちんと取っておくことは、家政書が家計管理者の当然の義務であると説きわめて単純な良識的行為かもしれないが、実際には守られることが少なく、難しいことである。ルヌヴェーは家賃支払時期の慣行を、労働者が給与を受け取る周期に対応させて設定することが、家主と借家人双方にとって望ましいという現実的

(14) *Ibid.*, p. 18.

(15) *Ibid.*, pp. 18–20.

な提言を行っている⁽¹⁶⁾。

住居に置くべき調度品についても、単なる必需品としての存在として見るより、生活に彩りを添えるもの、家族の歴史を刻むものとしての存在価値の方を、彼は重視している。生活の大部分を過ごす場が美しく楽しいものであるかどうかは、そこで生活する者の精神に驚くほどの影響を与えるため、高価なものである必要はないが、おごなりでない趣味のよいものが求められることになる。また、家具はその時々が必要に応じ、一世代をかけて選択され整えられていくものであり、また次世代へ伝えられていくものでもある。家族の歴史を刻み、そのアイデンティティーを確認する大切な道具でもあるのだ。最も大きな出費が必要となる新婚時の家具の購入には、特に慎重さと計画性が必要となってくる。ベッドや箆笥や食器棚への支出を儉約して大箱や木箱ですませしてしまう代わりに、リネン類の枚数だけは競うように多く揃える農村部の伝統的な嫁入り支度にルヌヴーは批判的で、そうした方面への支出をもっときちんとした家具の購入に回すべきだとしている。質の悪い家具ではいくら持っていていざという時には売却することもできない。産業発展の中でも最も遅れていて最も将来性のある分野が家具製造業であり、堅牢、簡素かつ優雅な家具の生産・販売を奨励して、農村の慣習を変え、生活の質の向上と、家具産業に携わる労働者の生活状態の向上を図るべきだとする⁽¹⁷⁾のである。

食事内容では、フランス人の好むパン食や、国民食とも言われるポトフに対しても彼は疑問を投げかけている。他国に比べると多量のパンを、僅かな肉のエキスを煮出したスープに浸して食べる穀物中心の単調な食事は、彼にとって健康を害し、かえって浪費を促すものであった。その考え方は、今日の栄養学的観点から見ると問題はあってもよいかもしれないが、当時の一般の栄養状態を考えてみれば理解できることである。肉体労働者の身体を維持するためには、穀物中心の従来の食生活型から、動物性の栄養源である肉、そして馬鈴薯を始めとした野菜類の消費を増大させて、バラエティ豊かな食事をとる新しい食生活型への方向転換を行わねばならないという彼の意見は、より豊かな生活を労働者に望む彼の主張と一致するものであろう。穀物生産より家畜生産に、よりコストがかかったとしても、それによって生み出される労働者のより生産的な活動と、その結果としてのより高い報酬が、それを十分補って余りあるものにして⁽¹⁸⁾くれるとしている。

また、食費の節約についてのルヌヴーの考え方は大変ユニークである。品物が安

(16) *Ibid.*, pp. 20–21.

(17) *Ibid.*, pp. 21–26.

(18) *Ibid.*, pp. 33–38.

い時に大量に買い、消費できない分は保存食にして長期に消費していくことが賢い買い物の知恵であるというのが、家政書の普通の書き方である。しかしルヌヴーは、保存が可能な食品は限られており、つつい一時にたくさん食べてしまうことになるか、あるいは残した物を劣化させて廃棄することにもなりがちだとし、むしろ浪費と無駄を招く元であると考える。彼は、必要に応じてその都度少量ずつ食品を買う方が、小銭の細かい管理をする習慣が付き、堅実な儉約観念を大衆に広めることになるのではないかと述べている。⁽¹⁹⁾これは、労働者の生活改善を訴えるルヌヴーの立場に反しているように見えるが、食事の支度にあまり時間をかけることが許されない労働者家庭の実情を踏まえた考えともいえる。

労働者家庭のなすべき最も重要な支出とルヌヴーが位置づけているのは、子どもの教育に関わるものである。忙しさを理由にして里親や使用人など無知で心ない他人の手にゆだねてしまうのではなく、家族の中で両親手ずから子どもを育てることが、人としての情けを知る人間を育てるのであり、子どもたちの養育を責任を持って引き受けることが家族の最も尊い神聖な義務であることを彼は強調している。従って、家族による子どもの養育を継続していくためには、通学制の教育を受けさせることが最適である。⁽²⁰⁾では、子どもたちに教育をどこまで受けさせるべきなのか。

教育を受けさせることは、単なる消費ではなく、将来百倍にもなって返ってくる生産的な先行投資であるとルヌヴーは述べている。ただし、教育は大変費用のかかるものなので、どこまで投資のリスクを冒すべきなのかが問題である。初等教育は、読み書き、算数、歌唱、図画などの基礎的素養を身につけられるだけでなく、多様な社会階層に属する子どもたちと同じ学舎で席を並べて過ごすというこの上ない社会勉強の機会を与えてくれる。従って、初等教育は、あらゆる家庭の子どもにとって人生の準備として重要であり、「学ぶことを学ぶ」という教育の下地を作るための不可欠なものであるとルヌヴーは主張する。しかし、当時のそれ以上の高等教育については、高い費用に比してその効用のほどは疑問であり、そこで得たものを活かせる職業はごく限られた数しかないため、労働者の子どもにとって不必要な投資になりかねない。教育が大切であるからといってただむやみに上級学校へ行けばいいという考えは親として安易であり、かえって弊害を招く。労働者には効率の良い実践的な職業教育を、というのが教育についての彼の意見である。⁽²¹⁾しかし、ルヌヴーは労働者にとってさらなる教育が不必要だと考えているわけではない。労働者が

(19) *Ibid.*, pp. 29–32.

(20) *Ibid.*, pp. 73–76.

(21) *Ibid.*, pp. 76–81. *Ibid.*, pp. 81–89.

その知的能力を向上させ続けるため、書物、音楽、絵画などを通じて自己研鑽を図ることの必要性を彼は主張している。そのための本や新聞、雑誌などの購読費用が必要予算の中に組み込まれている⁽²²⁾。また一方で、実際的かつ健全な職業教育の場が現状では皆無であることを彼は認めており、安い費用で労働者や農民の子弟が学ぶことができ、職を失った若い労働者も再教育を受けることができるようないわゆるファランステール式の職業学校を創設する自らの夢が長々と語られてもいる⁽²³⁾。

労働者家庭を困窮の淵に落とす生活の様々なリスクに対し、ルヌヴーは家計の許す限りの範囲内で最大限の対処をするよう呼びかけている。ただし、あくまで教育費を圧迫しない限りにおいてのことではあるが。もっとも、教育支出が子どもの将来への先行投資であり、老後の両親の生活を保証してくれるものだと考えれば、これも一種の保険になるわけである。

保険などの相互連帯的の制度に関しては、フランスはまだかなり立ち遅れており、当時ようやく整いつつある段階にあることを彼は指摘して、これらの制度の利用を家長が早急に検討するよう勧めている。家族のために最も必要な支出としては、まず火災保険が挙げられている。被害の多い農村部と比べて都市に住まう労働者はこれに関心となりがちだが、稀にしか起こらない災害だからといって、1年に数フランの僅かな支出を惜しむのは愚かな儉約でしかない。自らの財産の保全のためだけでなく、火元となった場合の近隣への補償など付加的な保険をかけておくことがより望ましい。次に必要性があるのは病傷害保険で、働き手の家長はもちろんのこと、労働者であり家事の担い手でもある主婦も——ちょうど労働者女性向けの保険制度が設立され始めたところでもあり——加入することを勧めている。また、まったく労働しない家族成員についても、家計に重い負担となる医療費を補うための保険は必要だとして、まだ実現していないそうした制度の創設を強く提唱している。その他、死亡保険と老齢年金をミックスした混合保険、失業保険、障害者用の保険など、人生に待ち受ける予見しうるあらゆるリスクに対処するため、可能な限りこうした制度に加入しておくことが、ここでは勧められている。ルヌヴーにとって保険制度とは、将来の生活への安心感という何よりの精神的・道徳的やすらぎを人々に与えてくれものであり、一人の努力では困難なことを相互の助け合いによって実現できる、最も素晴らしい形での社会的連帯 (solidarité) の具現化——「一人は万民のために、万民は一人のために」——として、非常に高く位置づけられるもの

(22) *Ibid.*, pp. 99–103.

(23) *Ibid.*, pp. 123–124.

である。⁽²⁴⁾この社会的連帯こそ、ルヌヴーの尊ぶ中心的思想なのだ。彼が家庭の経済危機管理の手段として、貯蓄ではなく保険を強く勧めているのは、ただ自らの生活の保全と富の蓄積をめざした貯蓄を、個人を他者と切り離す利己的性格のものと考えているからである。そうした貯蓄が実のある資本に成長する確率はルヌヴーによればせいぜい10%程度で、たいていは病気や失業時に、あるいは投資の失敗によって使い果たされてしまい、他からの助けも得られないまま悲惨な状況に陥ってしまうこととなる。それに対して保険は、自己と他者の両方を、ともに生活のリスクを背負う者として常に共通の次元に置いて考える視点から生まれたものであり、資本家や富裕者になる野望を捨てる代わりに、まさかの状況に陥った自らとその家族を、そして他者とその家族を破滅から救う道へと向かう選択である。しかも、保険制度の下に集められた資金は、その集団のための大きな資本となる。それは、銀行家の手にゆだねられ投機に回される貯蓄とは違い、ルヌヴーの言によれば、富の分散化・民主化を促すものであるのだ。⁽²⁵⁾

まとめにかえて

以上、ルヌヴーによる『家庭の予算』の記述をもとに、労働者の家庭経済に関する彼の視点を探ってきた。家政や家計に関するルヌヴーの論拠にはいくつかの問題点があるものの、社会カトリシズムの理想の下に、家庭生活の営みを、閉じられた小宇宙の出来事にしてしまうことなく、社会との結びつきの中でとらえようとしており、同時代の家政書では見えなかった部分に光をあてたものである。個人やその家族の利益のためにのみ家計を考えるのではなく、それらが集まって形成する全体的な経済総体への結びつきがここでは考えられようとしているのだ。個々の家庭にとって富の形成の一步となる貯蓄も、ただ貯め込まれているだけでは社会的には無価値なものでしかない。個々の家計が社会とつながり、家計で生み出される余裕部分が自己とともに他者を助け、豊かさを共有できるものでなくてはならないのである。そのようなものであってこそ、ささやかな労働者の家計も大きな意味を持つてくることになるのだ。そうした見地に立って、ルヌヴーは常識的で伝統的な儉約の美德に異を唱えるのである。将来における明確で生産的な目的を設定した上での節約や貯蓄は意味を成すが、地上の幸福に重きを置かず、確たる目的も見当たらない「蓄積こそ善なり」という農村社会的な経済感覚は、否定されるべきものである。借金という行為に対しておしなべて伝統的に見られる偏見についても、借金は信用

⁽²⁴⁾ *Ibid.*, pp. 89–99.

⁽²⁵⁾ *Ibid.*, pp. 106–110.

の裏返しであり、肯定的なとらえ方をすべきであるとルヌヴーは主張している。すなわち、経済活動が、自己が所有する資本によってのみしか行われえない社会は遠い過去のものとするべきである。自己の能力や知性を高め、個人とその家族の幸せを増すための借金は生産的、かつ社会的にも有益なものであり、無用な支出を満足させるための借金と同列に置くべきではない。こうした主張を見てみると、ルヌヴーはこの書で工業社会のための新しい経済道徳を模索しつつ提示したと言ってもよいだろう。そして、その主役となるべきなのは、社会の存在を忘れず、市民としての社会的・経済的役割を果たす個人であり、個人の生活なのだ。

このように、個々の家庭の経済的役割の重要性を主張したルヌヴーは、本書の終わりにおいて、ある肉体労働者の厳しい生活の現実を描き出している。遺産を元に事業を興したが、失敗して破産し、病みがちな身体を酷使して労働者としての生活を送る失意の男。家計を助けるため安い賃仕事に明け暮れるその妻と二人の娘。家族の希望である息子に十分な教育を施すこともままならない生活である。一家の家計は好転の兆しもなく物価高の波に苦しみ続ける。ルヌヴーが読者に投げかけるこの最後の厳しい現実と、彼が掲げる理想との乖離は何を意味するのか。家庭と社会とのいまだ不十分な結びつき、家計と経済総体とのあまりにも片務的な結びつきに他ならないのではないだろうか。